

福竜丸だより

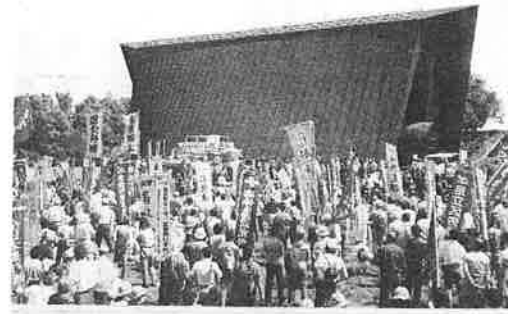
都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財) 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

第五福竜丸から広島へ 平和行進、展示館前を出発

被爆50周年。五月、ヒロシマ50年の思いをこめて世界に核兵器廃絶を訴える平和行進があいついで第五福竜丸展示館前を出発、八月の広島へむかいました。
五月六日午後一時、原水爆禁止世界大会実行委員会のよびかけによる「被爆50周年、核兵器廃絶国民平和大行進」が出発集会、およそ八百名の参加者が色とりどりの団体旗、のぼり、横断幕を、さわやかな潮風にはためかせて結集しました。



三上満行進実行委員会代表、河井智康世界大会実行委員会運営委員代表のあいさつのもと、来賓の日本共産党、日本青年団協議会、日本原水爆被害者団体協議会、非核の政府を求める会の代表がそれぞれ被爆50周年の原水爆禁止運動の前進と国際的意義の重大さを強調しました。小西悟被団協事務局次長は切々と被爆者の五十年の心を語りかけ「核戦争のない平和を望む被爆者の願いを必ず実現しよう」と訴えました。

高校二年生の矢野静さんはじめ、広島まで90日間約千キロを歩きぬく通し行進者一人ひとりが決意を述べ、「広島・長崎の火」、オーストラリアなど各国から贈られた連帯の旗をかかげ、二時すぎ行進が出発、「被爆50周年を核兵器廃絶への転機とするために——あなたも平和大行進をともに歩きましょう」とよびかけました。
五月七日午前十時、日本生活協同組合連合会が提唱する「核兵器のない世界へ！ 95市民平和行進」が展示館前を出発集会、都内各地、大阪、愛知、岡山ほか十数県の生協代表二百名余が集いました。反

展示館前広場いっばいに国民平和行進出発集会(上) '95市民平和行進の通し行進の青年たち(中)、日本山妙法寺の'95平和祈念行脚(下)

核国際法律家協会、日本青年団協議会、被団協、日本山妙法寺の代表のあいさつのもと、十五名の通し行進者が、青年らしい力強さとそれぞれ独特のパフォーマンスで決意を全身で表わし、集会に核兵器廃絶の熱意をみなぎらせました。
集会に先立って、大阪いずみ市民生協はじめ、奈良、和歌山、岡山、富山、石川、島根など生協の青年五十名余が、早朝から第五福竜丸の見学会を持ち、乗組員大石又七さんの体験を聞き、原水爆禁止運動の原点をかみしめました。
同日午後一時からは、日本山妙法寺が主催する「95平和祈念行脚」が久保山愛吉記念碑の前で出発集会、南無妙法蓮華經の旗幟、憲法九条を広めよう！ など大書された横断幕をなびかせ、五十名余のお坊さんらが集いました。
おりから進められているアウシュビッツ―広島・長崎、平和と生命の世界巡礼の報告、全国戦災障害者連絡会の杉山千佐子さんの激励、武田上人、木津上人はじめ行脚のお坊さんの紹介のあと、全員で記念碑に深々と合掌、南無妙法蓮華經の読経とうちわ太鼓をうちならし、広島への一步を踏みだしました。

科学と人間の進歩、平和への賛歌を描く 後藤陽吉

私の属している青年劇場は、今年創立30周年を迎え、飯沢匡追悼・戦後50年記念公演として、飯沢匡の「もう一人のヒト」を上演した。
物語りは太平洋戦争の敗戦の切迫、東京大空襲、広島、長崎への原爆投下等を背景に進む。天皇制の護持に狂奔する皇族や軍人、それらに利用、翻弄される庶民。終戦によってその庶民が解放され、新しい時代の幕開けをみせて、幕となるのである。
そこで私は老將軍、小沢中將を演じた。このお芝居の俳優座劇場での千秋楽が、実は三月一日、今年のピキニデーでもあった。

飯沢匡先生は昨年十月逝去されたが、ロッキード事件、時の首相田中角栄ならぬ棚岡格兵衛なる金権政治家を追究、風刺した「多すぎた札束」が私共との初の出合いであった。以来亡くなられるまで私たちは先生のご指導に与かったのであるが、この飯沢匡こそが、あのヒロシマの原爆の惨状をうつした写真を、アメリカ軍の占領が終わるや否や「アサヒグラフ」で一気に発表し、原爆被害の実相を日本国民に、更には世界の人々に知らせたのである。時一九五二年八月、当時先生はその編集長だった。飯沢先生は時々の世情を鋭い風刺で

貫き、笑いを武器とされ、更には飽くことのない探求の目で、日本と世界の平和と民主主義の道筋をさぐり、進歩に貢献されたと思う。今、先生は劇団の応接間の一角の額縁の中に微笑して鎮座ましまして居られる。
幸いまだ先生の息のかかった、つまり先生の演出による芝居は、それにかかわった俳優、スタッフともども今も健在である。
私たちは先程の「もう一人のヒト」を終えると、三月九日岐阜労演を初日に飯沢匡演出によるファンウィックの「喜劇キユーリ夫人」で中部、北陸を巡演し、四月二十三日富山での舞台を終えて帰京したばかりである。

キユーリ夫人なるマリーには黒柳徹子さんを客演に擁し、科学に純粹にいとむピエール・キュリーには千賀拓夫、私はその同僚で、ピクロと云い、特許で金稼ぎに精だす俗物。
この荒筋は、パリーの物理化学学校、ピエールやピクロの研究室に、ポールの女子学生マリーが姿を現すところから始まり、やがてマリーはキユーリ夫人となり、二人してウランを発見し、次々に幾歳月かかけて世紀のラジウムを精製分離、ノーベル賞に輝くまでの苦勞を克する愛の物語りなのである。

折しも北陸の金沢では、東京品川の公証役場の飯谷さん拉致事件や、地下鉄サリン事件の製造疑惑容疑で追究されているオウム真理教の一行と、四月九日、ホテルが一緒であったことが後で判明、黒柳さんにいたっては、その容疑者たちと同じ階の隣り合わせだった。オウム真理教の教団幹部、そして化学班は何をどうしようというのだろうか？
「キユーリ夫人」の中で、作者は——
ピエール しかしね、科学を通じて、
どういう目的を果たそうとしているの？
マリー 進歩を促進し、束縛と偏見から人間性を解放させることに貢献したいの。
ピエール それから？
マリー 辛い労働の廃止、工業と技術の促進、メディアの拡大、医学の発展、農業の合理化。それからあらゆる層に対する教育の徹底を計ること、迷信を失くすこと、それから、まだあるかしら？
——と云わせている。

そして私たちも、このお芝居で、科学と人間の進歩、平和への賛歌を描けたらと念じているのである。だから今だに核兵器を温存し核兵器開発に手を染める人々を、サリンづくりの犯人と同罪だと糾弾するものである。
(秋田雨雀・土方与志記念 青年劇場)

核兵器と科学者

連載 5

原爆開発の興奮と痛恨 (4)

— 科学者の自発的動員と大統領への「直訴」 —

小川 岩 雄

亡命先のアメリカで、中性子衝突によってウラン核が真一つに割れるいわゆる核分裂反応がドイツで発見されたというニュースを知らされ、しかもこの反応が理論的予想通り一〜三個(各分裂片から一〜二個)の中性子放出を伴うことを実験的に確かめたシラード博士らは、それが連鎖反応による核エネルギーの「解放」を初めて可能にするであろうことを確信し、学問的興奮に胸を躍らせる一方、ヒトラー政権下のドイツが早速それを利用して強力な新兵器(原爆)を作るのではないかとこの深刻な恐怖に襲われた。

この興奮と不安の入り混じった心境は、フェルミ、ウイグナー、テラー、ワイスコッパら、ヨーロッパから亡命してきた多くの中堅核物理学者にも共通したものであったが、とくにシラード、ウイグナー、テラーらハンガリー出身者、とりわけシラードはじっとしていられず、先ずこの分野の研究成果の公

表の中止を各国の研究者に呼びかけようとした。

しかしフランスのジョリオ・キュリーらはすでに関連論文を発表していたためこの試みは失敗し、連鎖反応による核エネルギー取り出しの可能性はたちまち日独ソ連を含む世界各国に知られ、多くの研究者が一斉に研究を開始することになった。

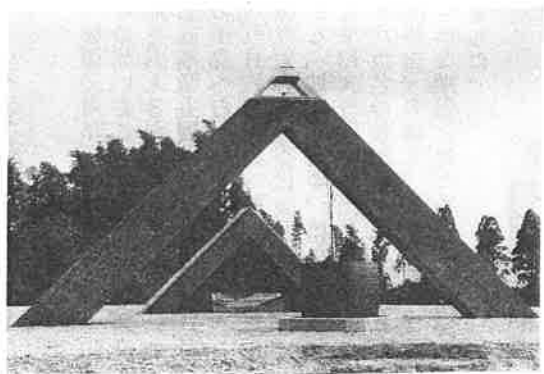
こうなるとシラードやフェルミは油断はできず、一刻も早く連鎖反応を実際に実現しようとして、さまざまな予備研究を行うため多くの研究者に呼びかけ、全く自発的な動員体制が瞬く間に形成される。それを促したのはいうまでもなくナチス・ドイツへの恐怖と技術的興味であった。

実験は取り敢えず各研究室の手持の器材や研究費を遣り繰りして進められ、得られた結果の多くは彼らの判断で当分学会での発表を差し控えることとした。しかし研究が進むにつれ、目標

の達成には途方もなくぼう大な設備と巨額の経費が必要なが分かってくる。とくに一九三九年一月ごろ米国プリンストン大学に滞在中のボーアが予想し、間もなく実証されたように、速さの遅い中性子の衝突で核分裂を起こすのは天然ウラン中に僅か〇・七パーセントしか存在しないウラン二三五という同位体だけであって、残りの九九・三パーセントを占めるウラン二三八は中性子を吸収するばかりで連鎖反応の進行を妨げる。そのためウラン金属中で核連鎖反応を爆発的に起こすには、邪魔なウラン二三八を大幅に減らし、二三五の含有率を例えば九〇パーセント程度まで「濃縮」しなければならぬ。しかしそれには僅か一・三パーセントという質量差だけを利用して、数トンもの天然ウランから十数キロのウラン二三五を分離する必要がある、それは当時の物理学界の常識では、実際上実行不可能な作業だった。(それを後に何とか実現して作ったのが広島原爆である) それ程でない連鎖反応の基礎研究さえも、経常研究費だけでは到底間に合わないことは明らかだった。

そこでフェルミやシラードたちは、五月から七月にかけて陸軍や海軍、諸企業、財団に援助を求めたり、ラジウム放射線源を借り受けたりして、財源確保に奔走したが、軍部や政府の反応はいずれもひどく冷淡で消極的だった。軍部やメーカーは当時主にレーダーや軍用機などの「堅実な」開発に追われ、一部の物理学者が訴える核兵器などという「夢のような」技術目標への重点投資にはさっぱり関心がなかったようだ。

この手紙は十月の初めに漸く大統領の手に届いたが、それに先立ち九月一日にはドイツがポーランドに侵入して英仏が宣戦布告で応え、第二次大戦が開始されていた。大統領は直ちに提案を受け入れ、核開発計画が始めて正式に実施されることになったのである。(立教大学名誉教授・協会理事)



人間の歴史のなかで人が人を殺す戦争ほど残酷なものはないと思います。それも今世紀に入って大量殺人兵器の原子爆弾が開発されアメリカはその原爆を広島と長崎に投下し、数十万の人が一瞬にして殺され、被爆者の苦しみは今も

戦後五十年・写真集『平和のモニュメント』をまとめて思うこと

藤 田 観 龍

戦時中に生まれた私は、福岡の田舎で庭の防空壕に入った事をかすかに覚えてはいるくらいで戦争体験はありませんが、太平洋戦争で日本がアジア諸国を侵略し二千万人の犠牲者と日本で三百十五万人が亡くなったことを思うと、二度と戦争を起こしてはならないと強く思います。

空襲で焼け野原から復興した戦後日本の各都市では、戦争犠牲者を悼み平和への誓いを込めた平和の碑が各地に建立されました。私は野外彫刻に興味をもちこれら平和のモニュメントの撮影を続けてきました。空襲など戦争で犠

牲になった一般住民や学徒などの追悼碑と凄惨な地上戦が闘われた沖繩戦や原爆の広島・長崎に関する慰霊碑などです。また一九八〇年代に入って世界的に起きた、核兵器廃絶の運動とともに自治体に「核兵器廃絶平和都市」宣言を要求する地域住民や民主団体の請願署名運動などで、全国の自治体で非核・平和都市を宣言した自治体は現在約一九〇〇にのぼります。これらの「非核・平和都市宣言」を記念した碑や過去の戦争の反省を含めた全国の平和の碑など百六十三点(国外五ヶ所)を収めた写真集『平和のモニュメント』新日本出版社刊・定価六千円)を出版しました。

戦争の残酷さを伝えるモニュメントは内外にあり戦争遺跡として保存されています。広島原爆ドームが幾度かの取り壊しの危機を乗り越え、広島市はドームの永久保存を決めています。この原爆ドームを「世界遺産条約」の文化遺産に指定し原爆遺跡の登録がのぞまれています。

私は数年前フランス中部リムザン地方のオラドル・シュル・グラヌ村を訪ねました。第二次戦中の一九四四年六月十日の昼さがりナチス・ドイツ兵が平和なこの

村をとつぜん襲い村人全員を集めて虐殺(六百四十二人)放火したところ。破壊と虐殺の村(十五ヘクタール)が今もそっくり保存公開されています。レンガ造りの店や住宅が破壊されたままの姿で保存されているのは世界で唯一ではないでしょうか。

一步この村に足を踏み入れると何か昨日のようなドイツ兵の残酷なまでの痕跡が目に見え込んできて、何とも薄気味悪い気分が襲われます。その日まで使われていたであろう足踏みのシンやベッドが焼け跡に転がった村の家々を一軒一軒歩いて見学できます。

その村の奥には資料館や犠牲になった住民の墓地もあります。いまではこの村の道路を挟んで新しいオラドル村ができ平和な生活が営まれています。忌まわしいドイツ兵の残酷な戦争遺跡として旧オラドル村は世界各地から見学者が訪れる遺跡になっています。

アメリカのビキニ環礁での水爆実験の生き証人「第五福竜丸」の保存・展示は原水爆の被害を三たび被った国民として、戦争の風化が見られる今、存在は貴重です。写真集にも核実験の被災船として掲載し核兵器廃絶の願いになればと思っています。(カメラマン)

山本達雄さんが広島から持ちかえった原爆の火「平和の塔」。福岡県星野村が戦後五〇周年を記念して、新しい「平和の塔」に移され原爆死没者「慰霊の碑」と一体となった平和の塔が完成し除幕しました。(3月24日福岡県星野村星のふるさと公園平和の広場)